

相互行為の資源としての複文構文の意味 —カラ節とケド節の言いさし現象の考察から—

横森大輔

(京都大学 高等教育研究開発推進機構 非常勤講師)

yokomori.d@gmail.com

1. 問題の所在

1.1 言いさし現象

- 接続助詞 (例. カラ、ケド) は、ある節の末尾に付いて、その節 (例. カラ節、ケド節) を別の節 (主節) に対する副詞節としてマークし、**複文を構成**する (益岡・田窪, 1992; 日本語記述文法研究会, 2008)。
 - しかし、次の会話例にみるように¹、話し言葉においては、カラ節やケド節が、**主節を伴わずに単独で発話を構成**する現象がしばしば観察される。

(1) 1 → B: =.h あたし (>ちよと<) , 十一月と十二月さ:,
 2 A: うん.
 3 → B: 先輩と一緒に住む**から**.
 4 (0.7)
 5 A: は? (CF1684)

(2) 1 → B: あ: そうなんだ. [ポールは]なんか受かったって聞いたんだ**けど**.
 2 A: [そう .]
 3 A: え, ポール:?. (CF1684)

- これまで、「言いさし文」(白川, 2009) や「中断節」(Ohori, 1995) などの名前で論じられてきた現象。
- 従属節が主節のように振る舞うという現象は、日本語に限らず世界中の言語で報告されており、「Insubordination (従属節の主節化)」(Evans, 2007; cf. 堀江・パルデシ, 2009: 126) と呼ばれている。

1.2 これまでの研究と残された課題

- これまでの研究は、接続助詞としての本来の用法からは容易に予測できないような独特の**語用論的効果**に着目してきた (高橋, 1993; Ohori, 1995; 白川, 2009)。
- ケド節言いさし発話やカラ節言いさし発話の語用論的効果は**非常に多様**であり、単純な一般化は困難。
- とはいえ、接続助詞としてのケドやカラの本来の用法と、**全く別の現象として扱うべきではない**。
 - 次の例に示されるように、あるケド節が言いさしになるか主節を伴うかは、会話の動的な展開の中で決まるという場合もある。

(3) 1 A: すごい酸っぱい[香りがしそう]
 2 B: [あ::
 3 C: [すごいよね]=
 4 C: =えでもあたし酸っぱいハ- (0.2) 香りってよくわかんないんだ**けど**.
 5 → (1.0) (←反応の不在)
 6 C: 酸っ[ぱいの:]? (←ケド節の主節としての形式で産出される)
 7 B: [う :]ん (chiba0332)

¹ 本発表で提示するデータの概要と書き起こしの記法については、Appendix に付記した。

- 3 B: hahahaha
 4 E: hahahah
 5 C: お:::. (←Bに対する評価)
 6 (0.5)
 7 → B: 営業は↑^へね 残業がつきものですから. ((視:C))
 8 C: う:::ん.
 9 D: う:::ん. (Three Couples)

■ (2) 「相手の認識に含まれる誤りの訂正」タイプ：特徴と例

- 相手の発話や行動の後に、それとは見解の異なる情報を「カラ節言いさし」の形式で提示することで、**相手の認識を間違いとしてマークする、「訂正」という行為を行うことができる。**
- 言語的には、発話冒頭に「いや」という、相手の**前提への抵抗**を示すトークン (cf. Kushida & Hayashi, 2010) が共起することが多い。
- また、このパターンでは「から」を「って」で言い換えてもあまりニュアンスが変わらない。

(5) ((Aは、収録前日にB及びCと食事に行った際の、Bの言動に対して冗談交じりで文句を言っている))

- 1 A: 「げろの匂い[がす [る]ってゆった]ときさ, 向こうの[:,
 2 C: [uhhh[huh
 3 B: [uhuhu] [.hh
 4 A: .hh 方で店員さんが, いきなり包丁研ぎ始める° (の)° . 「シュッ」
 5 (0.2)
 6 C: ha[hahaha]
 7 A: [「シュッ」] (←ここまでのAの語りが訂正のターゲット)
 8 (.)
 9 → B: いやい[や. そんなホラーな, [話じゃないから].
 10 A: [「シュッ」] [「シュッ」] [「シュッ」] (chiba0432)

■ (3) 「相手が十分に認識していない情報の告知」タイプ：特徴と例

- ある情報を「カラ節言いさし」の形式で提示することで、**その情報に関連して、話し手は認識しているが聞き手は認識が不十分であるような情報**があることを示唆することができる。
- 最初の2つのパターンでは先行文脈中の特定の要素が「カラ節言いさし発話」のターゲットとして存在しているのに対し、このパターンではそのような**ターゲットは存在しない**。
- 言語的には、発話冒頭に**一人称代名詞**（「俺」、「私」、「うちら」etc.）が現れることが多い。

(6) ((ダラスに住むAからNYに住むBにかけている。断片中に登場する「先輩」「クミチャン」「ナルミ」は、いずれもAとBの共通の友人で、共にNYでダンスの修行をしていた仲間。この時点で、AだけがNYを去っている。))

- 1 B: 電話した?=前.
 2 A: (だ) Bさんとこもした. あたしはBさんとこにはメッセージのこさな- =
 3 =先輩とこも残さなかつたの: =
 4 B: =は:ん.
 5 A: どっちも: =,
 6 B: =あ:ん.
 7 A: .hでも:, たいがいちよつとあれだな: 思つて[: ,] anghah[もういいや. メッセージでも,]=
 8 B: [うん.] [ちよつと残してみた?]]

- 9 A: =一つでも残しとこうとか[思って,]
- 10 B: [本当:?) >どうも[どうも.]< =
- 11 A: [hh]
- 12 → B: =.h あたし (>ちよと<), 十一月と十二月さ:,
- 13 A: うん.
- 14 → B: **先輩と一緒に住む**から.
- 15 (0.7)
- 16 A: hは:?((呼吸混じり)) ((←「語り得ること」への関心の表示))
- 17 B: っつかね, クミチャンがさ, ナルミンとこいっちゃったんだよもう. ((←改めて語りを開始))
- 18 A: あ:::やっぱり:?
- 19 B: う:ん.
- 20 (0.2)
- 21 A: h::m
- 22 B: <だかへら>:, .hhhh あ, 今はまた別の人が住んでんのね?:あそこに:.
- 23 A: うん (CF1684)

3.2 資源としての接続助詞カラ

- 3つのパターンの共通点:
 - 聞き手と比べて話し手の側に**絶対的な認識上の権威** (Heritage & Raymond, 2005) がある。
 - 終助詞ヨがマークする認識的権威 (金井, 2004; Hayano, 2011) との違い:
 - ◇ ヨでマークされた発話: その情報によって「相手の認識に情報を追加する」
 - ◇ カラでマークされた発話: その情報によって「**相手の認識を改めさせる**」
- 接続助詞としてのカラ: 「そのままでは受け入れられ難いかもしれない主張・判断」を受け入れられやすくするために、その主張・判断の**根拠**を示し、その主張・判断を導く (横森, 2010)。
 - cf. ノデ: 「そのままでは理解されないかもしれない情報伝達」の理解を助けるために、背景的な事情を伝える。
- 節をカラでマークすること = 「そこから当然のように導かれる結論があり、そのことを話し手はよくわかっている (認識上の権威がある) が、聞き手はわかっていない」ことをインデックスする。
 - <絶対的な認識上の権威のもとで情報告知を行う>ための**資源**に。

4. ケド言いさし発話の分析

4.1 「ケド節言いさし発話」の相互行為上の働き

- 「ケド節言いさし発話」という形式が利用される相互行為のパターンとしては、少なくとも(1)「想定からの逸脱に対する反応叫び」、(2)「詳述促し」、(3)「問題対処促し」という3つがある。
- (1)「想定からの逸脱に対する反応叫び」タイプ: 特徴と例
 - 事態が話し手の想定から逸脱していることに気付いたとき、その**ギャップへの気付きを同じ空間にいる他者に利用可能にする**行為。Goffman (1978) が反応叫び (response cry) と呼んだものの一種。
 - 音響的・身体的に特定の受け手を持たないデザインにより、**独り言**または**ブロードキャスト** (Levinson, 1988) となる。
 - ◇ なお、このような発話デザインは、カラ節言いさし発話には極めて稀。
 - 言語的には、「超」「めっちゃ」「まじ」などの**強意表現**や、「えっ」「でも」など先行文脈との**断絶を表す表現**と共起することが多い。
 - ケドによって話者の想定からの逸脱が示され、それが「**注目に値する**」あるいは「**話題にするに値す**

る」ものとして他者に利用可能になる。

☆ 単なる「驚きの表示」とは異なり、新たな相互行為の展開への契機となる。

☆ 周りの他者は、それについての会話を展開することもあれば、視線や笑いなど非言語的行動で**対象への関心を示すだけの場合もある。**

(7) ((タバコを購入するために一旦レストラン出入口の自販機まで行っていた B が、テーブルに戻って来たところ。E は、この断片の直前に一人だけ遅れてやってきた。B 以外のメンバーは、この断片の直前に「雨が降ってきて大変だ」という話をひとしきりしていた。))

1 G: ((カトラリーケースをテーブルから落とす))

2 B: ((レストランの出入口からテーブルの方に歩いてきながら)) ていうか土[砂降り↑じゃ↓ない?]

3 G: [eh heh heh heh]

4 E: かなり, ^すごいよ.=

5 G: =失礼いたしました. nh ((「店員」が話す時のような声色))

6 (0.7)

7 → B: ((自分の席まで歩いてきながら)) え, まじ土砂降りなんだ**けど**。

8 (0.3)

9 E: すごい[よ:~?]

10 B: [^す]んごい土砂降り. ((座りながら。視線は椅子など))

11 (0.8)

12 E: [ほんとすごいよ?]

13 B: [>ありがと<ございま]:[す.] ((Gにカードを渡しながら。)) (Band Dinner)

■ (2) 「詳述促し」タイプ：特徴と例

- ケドによって認知的ギャップをマークするが、上記「反応叫び」タイプとは異なり、相手との会話が行われている状況で発せられることで、「相手の認知」との間に**ギャップがあるものとして**「自分の認知」を提示することができる。
- 言語的には、「～って聞いた」など伝聞動詞、「～と思う」など思考動詞、評価形容詞など、**話し手の主観に関わる述語**が共起することが多い。
- これにより、相手の方がよく知っている話題について、「自分の得た伝聞」や「自分が下した評価」を提示することで相手からより詳しい解説を引き出すという、いわゆる「**釣り出し装置 (Fishing device)**」(Pomerantz, 1980) に用いられる。
- 相手の反応としては、単に同意・不同意を示したり、情報の受取を示したりするだけでは不十分で、**一定の長さの語り・説明・情報提供**をすることが求められる。

(8) ((AとBは、ダンス学校時代の共通の友人の近況を話している))

1 A: ナショナルツアーにも受かってんのよ:. (0.3) [あの人.]

2 B: [だれ:~?]

3 (0.2)

4 A: だいいー アイビー.

5 (0.7)

6 B: あ. スゴい[ね :~]

7 A: [だから]二月もニューヨークにリハーサルで来るしもちろん,
四月からロスで, (0.2)オープンする^し:,

8 (0.4)

9 → B: あ:そうなんだ. [ポールは]なんか受かったって聞いたんだ**けど**。

10 A: [そ う.]

- 11 A: え, ポール:?
 12 B: うん.
 13 A: なにに:.
 14 B: ニューヨーク.
 15 (0.9)
 16 B: に行くって私は引越し[するって聞いたよ:?)
 17 A: [< それ が あ]なた行くって>本人も言ってたのよ: (←詳述の開始)
 .hh (ちゃ) この間ダニエルに電話したらさ:, .h[h]「A ちゃ:ん,=
 18 B: [うん.]
 19 A: =.h 僕とポールはオーシャンドームに戻ることを考えています」だって. (CF1684)

■ (3) 「問題対処促し」タイプ: 特徴と例

- 「話し手の認知」を「相手の認知」とギャップのあるものとして提示し、相手からの反応を引き出すという点では、「詳述促し」タイプと共通。
- 言語的には、「ねえねえ」「すみません」など**呼びかけ表現**を伴って、今まで自分に注意を向けていなかった相手に注意を向けさせることが多い。
- 言及内容が話し手にとっての問題やトラブルとして理解できる場合、ケドで相手の認知とのギャップをマークすることで、**責任者たる相手に適切な処置を求める**発話とすることができる。

(8) ((C&D 夫妻の住むアパートに、その友人である A, B, E, F が遊びに来ている))

- 1 C: う: ^お:, (.) やばいこれ. (0.5) >どうしよ<.
 2 (0.5)
 3 D: あ::, 結構いってる?
 4 C: (.) いっちゃったいっちゃった. (0.8) あこれやばいやばい.
 5 (0.7)
 6 F: [^ん:].
 7 B: [s :] し [み ?]
 8 → E: [>すませ] んちよと < ^このへんも:, ワインが,
 9 (0.7)
 10 → E: **こぼれちゃったんすけど**.
 11 (0.3)
 12 D: huh hu hh ((Eのグラスの辺りを見ている))
 13 (1.1)
 14 C: あ, あ.
 15 (2.0) ((Eはテーブルを拭く。Dはその様子を見ている。))
 16 D: もうね:, やっぱここ, (.) h 人が住んでる家なんでね: この:,
 17 (0.5)
 18 B: 確か[に][ね:?) (Three Couples)

4.2 資源としての接続助詞ケド

■ 3つのパターンの共通点:

- **話し手の気付き・伝聞・評価・思考**が、何らかの**認知的ギャップ**を抱えたものとして提示される。
 - ◇ 世界とのギャップ: 想定からの逸脱
 - ◇ 相手とのギャップ
 - 認識的な非対称性
 - 問題対処責任の非対称性

- 接続助詞としてのケド：主節と対比的な補足情報を提示する。
- 節をケドでマークすること＝「メインの談話の流れからの逸脱・例外」としてインデックスする。
 - <自分の認知を世界ないし聞き手と対置することによって可能になる様々な行為>のための資源に。

5. 結語

引用文献

- 金井薫. 2004. 「会話における認知的権威の交渉—終助詞「よ」、「ね」、驚き表示の分析を通して—」, 『語用論研究』 6, 17-28.
- 串田秀也. 2006. 「会話分析の方法と論理—談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」, 伝康晴・田中ゆかり (編) 『講座社会言語科学 6 方法』, 188-206, ひつじ書房.
- 白川博之. 2009. 『言いさし文の研究』 くろしお出版.
- 高橋太郎. 1993. 「省略によってできた述語形式」, 『日本語学』, 12(.9), 東京: 明治書院, 18-26.
- 日本語記述文法研究会. 2008. 『複文』 (現代日本語文法 6 第 11 部), 東京: くろしお出版.
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ. 2009. 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』, 東京: 研究社.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』, 東京: くろしお出版.
- 横森大輔. 2010. 「認知と相互行為の接点としての接続表現: カラとノデの比較から」, 山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎 (編) 『認知言語学論考 No.9』, 東京: ひつじ書房, 211-244.
- Ariel, Mira. 2008. *Pragmatics and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Den, Yasuharu, and Enomoto, Mika. 2007. A scientific approach to conversational informatics: Description, analysis, and modeling of human conversation. In T. Nishida (Ed.), *Conversational informatics: An engineering approach*, 307-330. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Evans, Nicholas. 2007. "Insubordination and its uses." In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366-431. Oxford: Oxford University Press.
- Goffman, Erving. (1978). Response Cries. *Language*, 54(4), 787-815.
- Hayano, Kaoru. 2011. "Claiming epistemic primacy: Yo-marked assessments in Japanese," In T. Stivers, L. Mondada, & J. Steensig. (eds.), *The morality of knowledge in conversation*, 58-81, Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, John. and Geoffrey Raymond. 2005. "The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and Subordination in Talk-in-Interaction," *Social Psychology Quarterly*, 68 (1) 15-38.
- Jefferson, Gail. 2004. "Glossary of transcript symbols with an Introduction." In G. H. Lerner (ed.) *Conversation Analysis: Studies from the first generation*, 13-23. Philadelphia: John Benjamins.
- Kushida, Shuya and Makoto Hayashi. 2010. "Responding with resistance to WH-questions in Japanese talk-in-interaction," Paper presented at *International Conference on Conversation Analysis 10* (7 July, 2010 Mannheim).
- Levinson, Stephen J. 1988. "Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman's. Concepts of Participation." In P. Drew and A. Wootton (eds.) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, 161-227. Cambridge: Polity Press.
- MacWhinney, Brian. 2007. "The TalkBank Project." In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Pomerantz, Anita. 1980. "Telling my side: 'limited access' as a 'fishing device'," *Sociological Inquiry*, 50, 186-198.
- Schegloff, Emanuel A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis, vol. 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel, Elinor Ochs and Sandra A. Thompson. 1996. "Introduction," in Elinor Ochs, Emanuel Schegloff, and Sandra A. Thompson. (eds.) 1996. *Interaction and Grammar*, 1-51, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sidnell, Jack. 2010. *Conversation Analysis: An introduction*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Thompson, Sandra A. and Elizabeth Couper-Kuhlen. 2005. "The clause as a locus of grammar and interaction." *Discourse Studies* 7 (4/5), 481-505.

Appendix: データと書き起こし記法について

本研究は、約 18 時間分の自然会話データの分析に基づいている。会話データは、大きく「横森が収録したもの」、*CallFriend Japanese Corpus* からの引用、『千葉大 3 人会話コーパス』からの引用に分けられる。

CallFriend Japanese Corpus とは、在米日本人同士の長距離電話の通話データであり、*The TalkBank Project* (MacWhinney, 2007) にて一般に公開されている。また、『千葉大 3 人会話コーパス』(Den & Enomoto, 2007) とは、千葉大学の伝康晴氏と榎本美香氏を中心に作成された会話コーパスである³。そのうち、この資料に引用した会話例は、以下の通り。

データ ID	データソース	時間	人数	会話場面
<i>Band Dinner</i>	横森が収録	100 分	8 人	市民吹奏楽団メンバーで夕食をした際の会話
<i>Three Couples</i>	横森が収録	120 分	6 人	3 組の夫婦による食事・団欒場面
CF1684	CallFriend コーパス	30 分	2 人	アメリカ在住の日本人同士による電話会話
Chiba0332	千葉大コーパス	10 分	3 人	収録のために集められた友人同士の会話
Chiba0432	千葉大コーパス	10 分	3 人	(同上)

また、データの書き起こし記法は以下の通り。基本的には会話分析のスタンダードである Jefferson (2004) に準拠している。

凡例	意味
(.)	0.2 秒未満のわずかな無音区間
(0.2)	0.2 秒以上の無音区間は、秒数を小数点第一位まで記す
.h	吸気音
h	呼気音
は(h)い	言語音が、笑い声など呼気音まじりで産出されている場合、その音を表す文字の直後に(h)と記す。
\$はい\$	笑い声は起きていないが、笑いの表情を伴ったような声色の場合、その区間を\$で囲む。
^はい	プロミネンスのある音の直前に^を記す。
<u>はい</u>	強い音や大きい音は、その区間に下線を施す。
↑はい	音の高さに有標な上下がある場合、矢印で記す。
°はい°	小さい音は、その区間を°で囲む。
(はい)	音声をはっきり聞き取れない区間は、聞き取りの候補を括弧でくくる。
「はい」	声色や音の高さなどによって、他人の発言や思考を引用している場合。
<はい>	周囲の語より、相対的にゆっくりと産出されている場合、その区間を< >で囲む。
>はい<	周囲の語より、相対的に早口で産出されている場合、その区間を> <で囲む。
はい.	下降音調で韻律的な切れ目がある場合。書き言葉と異なり、統語や意味的な切れ目や、発話行為(疑問か主張かなど)とは完全に独立である。これは以下も同様である。
はい,	すぐに言葉が続きそうな形で、韻律的な切れ目がある場合。
はい_	平板な音調で韻律的な切れ目がある場合。
はい?	上昇する音調で韻律的な切れ目がある場合。
は-	話しかけた言葉を途中で切った場合。
はい:	音が引き伸ばされる場合。
=はい	無音区間が一切無く発話の産出が続いた場合。
は[い]	複数の話者の声が重複した場合、[]でその区間を示す。
((外を見ながら))	文脈情報や非言語的行動は、二重括弧で記した。
(その他)	笑いや非言語的音声は、ローマ字を用いて可能な限りその音声的特徴の再現に努めた。また、カラ節およびケド節は太字で記し、さらにカラおよびケドには囲み線を施した。

³ データ利用を快く許して下さった伝康晴氏(千葉大学)に感謝します。